ヨシ焼きの再開に向けた取り組みについて

小野　正人

関東地方整備局　霞ヶ浦河川事務所　湖沼環境課　（〒311-2424 茨城県潮来市潮来3510）

「妙岐ノ鼻」(稲敷市浮島地先)は，面積約50haの霞ヶ浦最大の湿原である．ヨシを主体とした湿地には，多様な動植物が生息し貴重種も多く確認されている．また，古くから茅の採取場として利用され，現在も刈り取られた茅(しまがや)は，日本三名園である水戸の「偕楽園・好文亭」の茅葺き屋根にも使用されるなど，文化的な価値も高い．しかし2005年以降はヨシ焼きが実施されなくなり，貴重な植物群落の質の低下が懸念されている．このため、湿地環境と伝統文化の保全のためヨシ焼きの再開と継続が必要であり，今回，再開に向けた取り組み内容，実施結果，今後の課題等について報告する．

キーワード　ヨシ焼き，生態系保全，伝統文化，しまがや，地域連携

1. はじめに

「妙岐ノ鼻」は，霞ヶ浦(西浦)の南西に位置し，面積約50haを有する霞ヶ浦最大の湿原である（図-1，2）．

図-1 位置図

図-2 妙岐ノ鼻 全景

ここには，ヨシを主体とする湿性植物群落が分布し，環境省による第2回自然環境保全基礎調査(1978年)では，ヨシ，マコモ，ガマ群落は「自然状態を保っている草原として保存の価値がある」として特定植物群落に選定されている．

近年の調査では，国・県指定の絶滅危惧種19種を含む約300種の植物の生育が確認されている．特にカドハリイ(図-3)は全国唯一の自生地である．

また，これらの植生環境を好む鳥類も多く見られ，代表的なオオヨシキリの他，オオセッカ(絶滅危惧ⅠB類)(図-4)やコジュリン(絶滅危惧Ⅱ類)の繁殖が確認されている他，チュウヒ(絶滅危惧ⅠB類)のねぐら入りも見られるなど，野鳥観察に訪れる人も多い．

図-3 カドハリイ

図-4 オオセッカ

一方，妙岐ノ鼻は古くから茅の採取場として使用され，現在も文化財修繕等に用いられるなど，茅職人等の関係者からはその品質がとても高く評価されている．

妙岐ノ鼻のヨシ焼きは、「ヤーラモシ」(野原燃し)と呼ばれ，少なくとも1955年以前から毎年行われてきたが，環境問題等の社会情勢等から2005年以降は行われていなかった．

2. これまでの状況

妙岐ノ鼻は，かつて茨城県浮島村の村有地であったが，1955年に浮島村と古渡村が合併し桜川村（現稲敷市）

が発足した際に浮島財産区の所有となった．旧浮島村の村民（225 戸の旧家）が入会権（採草権）を持ち，主に自家の茅葺屋根で使用するための茅刈りが行われ，各戸の刈り取り場所は、抽選によって決められていた（図-5）．また、茅職人も住民から入会権を購入し刈り取りをしていたようである．ほぼ全域刈り取られていたこの時代は，「ヤーラモシ」の規模は小さかったと考えられる．

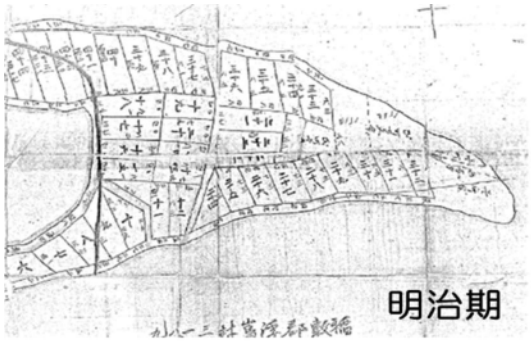

図-5　刈り取り場所の区割り

その後，屋根材が茅葺からトタンや瓦に変わっていく中で茅刈り箇所が少なくなり，結果，刈り残しが多くなった事で「ヤーラモシ」の規模が大きくなっていったようである．

さらに霞ヶ浦開発事業に伴い 1987 年に独立行政法人水資源機構が土地を買収した後は，入会権は消滅したが刈り取りは継続出来る条件であったため，現在も数名の方が継続して一部刈り取りを行い，茅職人へも供給している．買収後の「ヤーラモシ」は，生態系保全の観点から水資源機構から浮島財産区へ依頼する形で継続されていた．特に 1990－1991 年は「夢のうきしま野火まつり」と称して，村おこしイベントとしても行われていた．

しかし，2005 年の「ヤーラモシ」終了後，市民団体から「野焼きは環境汚染である，今後も実施するのであれば裁判を起こす」などと意見が寄せられ，浮島財産区は，今後は主催者として実施しないこととなり，以降中止されている．一方，水資源機構においては土地の所有者ではあるが，元々地元が主体の行事であったことから，主催者としての実施は困難という立場である．[1)]

行政関係者，浮島の茅刈り者，茅職人，生態学者は皆「ヤーラモシ」は行った方がよいと考えていたが，2011 年の東日本大震災の影響もあり，なかなか再開には至らなかった．

3. 妙岐ノ鼻での「カモノハシ」の重要性

(1) 植生環境としての重要性

妙岐ノ鼻には，300 種以上の植物が生育し，唯一生育が確認されてる「カドハリイ」も重要であるが，最大の特徴はヨシの下草として生育しているカモノハシ（イネ科）である（図-6）．

図-6　カモノハシ

図-7　カモノハシ株の微高地

カモノハシの株は，周辺地盤より 10 cm程度高くなっており（図-7），そこには蘚類が繁茂し，さらに別の植生が生育する好循環を形成していて，ファシリテーターとしての役割を担っている．特に，ヨシ-カモノハシ-蘚類の植生では，他植生より種の多様性が高く，絶滅危惧種もそこに集中するなど，貴重な環境となっていることが確認されている（図-8）．[2)]

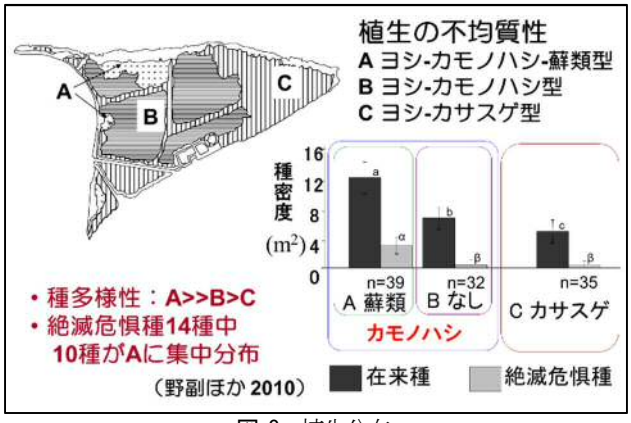

図-8　植生分布

(2) 伝統文化保全の観点からの重要性

妙岐ノ鼻で採取される茅は，カモノハシを主体とした「しまがや」（図-9）と呼ばれ，その品質が高いことから茅業界ではブランド品とのことである．

水戸・偕楽園の好文亭（図-10）をはじめ，文化財指定された県内 10 数か所の建造物の屋根の葺き替えや修繕に使用されている．

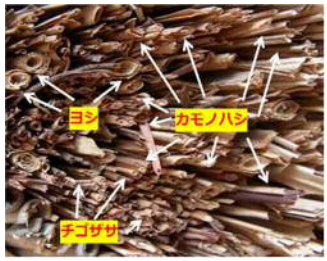

図-9　カモノハシを主体とした「しまがや」

図-10　好文亭

4.「ヤーラモシ」の必要性と効果

(1) カモノハシ群落の減少

前述のとおり，妙岐ノ鼻ではカモノハシが重要な役割をしているが，近年減少傾向が確認されている（図-11）．[3)]

これは，水資源開発事業に伴う水位上昇もその一因であると推察されるが，茅刈りや「ヤーラモシ」が行われていない影響も拍車をかけていると想定される．

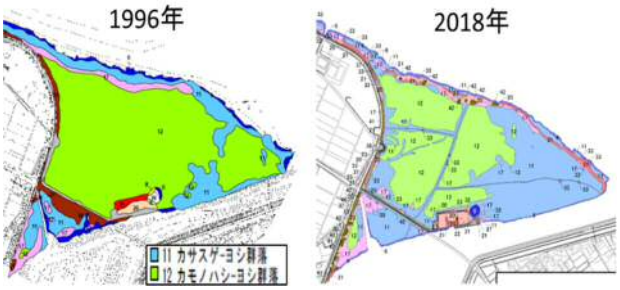

図-11 植生の変化

(2) ヨシ焼きによるカモノハシ成長の効果

ヨシ焼きは，植物の生育促進，害虫駆除，樹林化抑制などの効果があるが，現地実験の結果，カモノハシの成長に対しても効果が確認されている（図-12）．[4)]

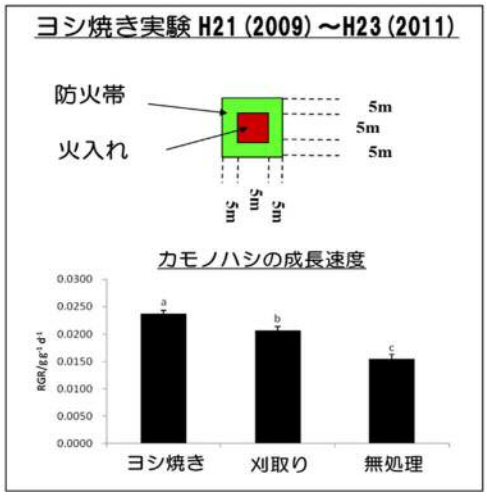

図-12 ヨシ焼き後のカモノハシの成長速度

以上より，妙岐ノ鼻の植生についてこれ以上の質の低下や減少を抑制し，保全するためには，「ヤーラモシ」は必要な手段の一つであると言える．

4. 再開に向けた契機、取り組み内容と状況

妙岐ノ鼻の所有者である水資源機構では，継続的に植生や鳥類の調査を行っており，カモノハシ群落が減少傾向であることからヨシ焼きや刈り取りなど，何らか対策を進めたい意向であった．河川管理者である当事務所では，土浦市で進めている自然再生事業箇所で，3年前から維持管理のため試験的に火入れ管理を始めたところであり，妙岐ノ鼻の再開も条件が整えば協力・参加したいと考えていた．

そのような状況をさらに後押しするタイミングで，2018年12月に河川水辺の国勢調査アドバイザーの西廣先生から，ヨシ焼き再開を皆で進めていきたいとのお話があり，これが契機となり先生と水機構，我々の3者で打合せを行い，再開に向けて互いに協力して進める事となった．

再開に向けては、主に以下の点に留意して進めた。

(1) 河川管理者が主催者として実施．

過去の経緯から，稲敷市や浮島財産区，水資源機構も主催者として実施しにくい事と，河川管理行為としての野焼きは廃棄物処理法の例外規定であるため，主催は河川管理者となることが一般の方々にも理解されやすいと考え，当事務所とした．

(2) これまでの状況や課題を確認し地元の理解を得る．

過去に環境問題の意見を頂いた団体へは、正確な情報が収集できなかったため，特に対応はしなかったが，地元の稲敷市役所，消防，警察等の関係者や地元区長との調整や説明は，過去の実績から水資源機構が中心になって進め，当事務所も同行した。意外にも「ヤーラモシ」に反対する方は誰も居らず，焼いた方が良いと言って頂ける方が多かった．

但し消防署においては，予定してる3月3日は別の場所で消防訓練の開催が決まっており，現地での警戒は対応できないと言われていたが，統括する稲敷市・危機管理監の計らいで，妙岐ノ鼻での警戒を訓練の一部として行うことにして頂いた．しかし，これまでの野火等の状況から，一度燃えると消火活動が困難な場所で鎮火を待つしかないため，防火帯を20m以上設けるなど十分な対策をするように指導を受けた．

また，対岸に位置する地区には牛舎があり，過去には煙が流れて牛に影響があったなどの意見もあったため，風向・風速の状況は要注意であると情報を共有した．

(3) 現地状況を十分把握する．

ヨシ焼きの実施範囲は，多くの効果を発揮したいため，茅刈り実施個所，鳥類の生息箇所（チュウヒのねぐら）に影響のない範囲で極力大きくする．このため野鳥の会や茅刈り者への説明や情報交換を現地で行い，さらに内部関係者へ周知頂き，ご理解を頂いた．

(4) ヨシ焼きの実際を体験する．

所内で経験者が少ないため，先立って小貝川で行われたヨシ焼きに参加・体験し，準備から着火，鎮火までの一連の流れや燃え方などを確認した．これにより，当日の作業がスムーズに行われた。

(5) 仲間をたくさん増やす．

多くの機関や関係者が関わっていることは，一般の方々へヨシ焼きの必要性や重要性の理解につながると考えられるため，茨城県関係（生物多様性センター，自然博物館，霞ケ浦環境科学センター）や茅職人にも参加協力を依頼し，参加の輪を広げた．また，岐阜大の先生や日本茅葺き文化協会の参加協力もあった．渡良瀬遊水地や小貝川などでも国を含めて多くの団体が参加し実施されている．

【実施までのスケジュール】

2018年12月 ・3者打合せ （スケジュール、役割分担等）
2019年 1月 ・現地確認 （3者、野鳥の会副会長、茅利用者）
・他事例体験①（小貝川河川敷 / 常総市）
2019年 2月 ・他事例体験②（母子島遊水地 / 筑西市）
・関係者等説明及び協力依頼 （稲敷市、地元4区長、駐在、消防署、隣接3市役所と消防）
・記者発表 （22日）
・事前準備 （防火帯設置、25日）
2019年3月3日 ・「ヤーラモシ」実施

5. 「ヤーラモシ」再開の状況

3月3日(日), ヨシ焼き当日は朝から弱い雨が降り始め, 火がつくのか心配な状況であったため, 予定より少し時間を早めて開始した(図-13). 風向・風速も特に問題ない状況で, 周辺住民への影響もなく, 苦情等もなかった. マスコミや一般の見学者も来て頂き、計画していた範囲の全ては燃えなかったが, 再開に向けての第一歩の取り組みとしては大成功であったと考えられる.

図-13 着火後、燃え広がる様子

6. 課題、反省点等、今後の取り組み

ヨシ焼き実施後, 参加者へアンケート調査を行い改善点や反省点などをまとめた. 主な意見等は以下のとおりである.
多くの前向きな意見があり, 今後の更なる発展、連携に期待が持てると, 手応えを感じた.

1) 今回は簡単に済ませたが, 開会/閉会式をきちんと行う.（目的・意義等の説明, 参加者, 安全確認等）
2) 実施体制は, 自治体や茅利用者なども含め再考.
3) 受付, 見学者の誘導, 安全確保等.
4) 駐車場, 車の誘導.
5) 広報ブースの設置や更なるPR, パネル展示等.
6) 実施時期（水位との関係）, 範囲の拡大の検討.
7) ヨシ焼き後の観察会(市民参加)の実施.
8) 事前調整, 準備をもっと早くし, 広報する.
9) 植生変化はヨシ焼きだけが原因ではないので総合的な情報共有の場があるべき. 多様な分野の方が集まっているので, ワークショップ等を開催するなど発展させる.
10) 消防団は協力するので, 早めの日程調整を.

今後、参加者と現地観察会を行い, 別途行っている植生や鳥類調査結果の情報共有を行い, 上記課題も踏まえて次年度へ向けて意見交換や準備を具体に進めていく予定である.

7. おわりに

茅刈りと「ヤーラモシ」は, 妙岐ノ鼻の生態系保全に大きな役割を果たし, 人が手を入れて関わりがあったことでバランスが維持されてきたと考えられる.

この 50ha の湿地は, まさに霞ヶ浦の生態系サービスが凝縮した象徴的な場所である. 基盤サービス（多様な生態系機能の維持）, 調整サービス（植生帯による自然浄化機能）, 供給サービス（茅の利用）, 文化的サービス（茅の文化的価値）の全てが存在するからである.

つまり, 自然環境と人との関わりの重要性（人が関わることで, 自然からの恩恵を受ける）を改めて認識できる場所であると考えられる.

これらを地域の財産として誇れる場所として, 未来を担う子供たちへ引き継げるよう, 引き続き関係機関と連携し, 保全に努めていきたい.

図-14 参加者集合写真

謝辞：河川水辺の国勢調査アドバイザーであり, 妙岐ノ鼻の植生に関する研究の第一人者である国立環境研究所・西廣淳先生には, 各実験データや写真等のご提供はもとより, 現地でも多くのご指導を頂きました. ここに感謝の意を表します.

参考文献

1) 植松 拓理 ： ひとと自然のかかわりからみた霞ヶ浦・妙岐の鼻の生態系保全 (2007)
2) 野副ほか ： 霞ヶ浦湖岸「妙岐の鼻湿原」における植物の種多様性指標としてのカモノハシ (2010)
3) (独)水資源機構利根川下流総合管理所：妙岐の鼻他環境調査業務 (2019.3)
4) Wang ほか：Effects of traditional vegetation usage and management on the growth of facilitator keystone species in a moist tall grasslamd (2015)
5) 西廣 淳：浮島「妙岐の鼻」の植生管理について (2018)